

D-2 共働き家庭に関する研究(才3報) 幼児の性格と親の養育態度について
山口大教育 森田俊文

目的 昨年発表した才2報においては、小中高在学の子と親の関係から共働き家庭の問題を究明したが、今回は主として幼児の性格と親の養育態度の関係その他について調査し、働く母を持つ幼児の場合の問題点を究明したいと考えた。

方法 調査の対象児は、山口市及びその周辺の幼稚園々才児(主婦専業家庭児=H群)71名と、保育園々才児(共働き家庭児=W-H群)82名をえらび、これらの幼児の父母と教師、保育士に ①田研式社会成熟度診断検査、②高木坂本共著幼児性格診断検査、③親の養育態度に関するアンケート、④家庭環境調査を実施し、幼児全体については田中B式知能検査を行った。尚対象児H群、W-H群より更に各10名をえらび別に個別検査(バウムテスト及び幼児総合精神検査)を行った。

結果 性格診断検査の結果は、全般的にW-H群はH群より性格特性が低く出たが、全プロフィールの傾向は大体似ている。然しその中で不安傾向、退行性、攻撃性、家庭への適応性において両群の差が大きい。特にW-H群は情緒不安定児が多くみられた。然しその原因は必ずしも母親が働くことのみにあるとすることは出来まいか親の養育態度とかなり関係があった。特に幼児を性格上位群と下位群にわけた場合、下位群と親の養育態度との相関の大きいことがわかった。幼児の社会性は、H群もW-H群も比較的問題がないのは家庭環境や親の養育態度よりむしろ保育園や幼稚園の環境と関係があると考えられ、W-H群はH群にくらべて社会成熟度指数は高く(中でも集団への参加の発達年齢が最高)又H群は入园後の伸びが急速であることがわかった。